The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Lifestyles and psychosomatic symptoms among elementary school students and junior high school students
Author(s)	一色, 百合子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45438
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【8】

氏　　名	一　色　百合子（いっしき ゆりこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（医　学）
学位記番号	第　18939　号
学位授与年月日	平成16年6月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科社会系専攻
学位論文名	Lifestyles and psychosomatic symptoms among elementary school students and junior high school students （小中学生におけるライフスタイルと精神身体症状）
論文審査委員	（主査） 教　授　森本　兼曩 （副査） 教　授　武田　雅俊　　教　授　大薗　恵一

論文内容の要旨

〔目　的〕

小中学生におけるライフスタイルと精神身体症状との関連を調べることを目的として自記式質問票を用いて調査研究を行った。

〔方　法〕

小学4年生（9－10歳）と中学1年生（12－13歳）を対象に自記式アンケート調査を1997年から毎年1回、3年間にわたって実施した。対象者は大阪府A市の公立小学校（全11校中10校）と公立中学校（全5校）の生徒で、1年目は欠席者を除く小学4年生763名、中学1年生868名であった。質問票は本研究のため独自のものを用いた。調査内容はライフスタイル項目として睡眠時間、朝食の摂取状況、好き嫌いの程度、排便習慣、テレビの視聴時間に関して、精神身体症状として頭痛、腹痛、気持ちが悪い、食欲がない、朝起きにくい、目の疲れについてその頻度を質問した。ライフスタイル項目について睡眠時間は小学生8時間以上、中学生7時間以上、朝食の摂取状況は毎日、好き嫌いの程度はほとんどない、排便習慣は規則的、テレビの視聴時間は1日2時間以下を望ましいライフスタイルとした。そして望ましいライフスタイルに1点を与えて合算したものをHPI（Health Practice Index）とし、HPIの点数によって“poor”(HPI＝0-1), “moderate”(HPI＝2-3), “good”(HPI＝4-5)の3群に分けて解析を行った。精神身体症状の評価にはPSスコア（Psychosomatic symptoms score）を用いた。PSスコアはそれぞれの精神身体症状について“めったにない”を1点、“時々”を2点、“よくある”を3点、“いつも”を4点として合計点を算出した。統計解析は$SPSS_{v10.0}$を用いて横断的解析を行い有意水準は5％とした。

〔成　績〕

ライフスタイル項目に関して睡眠時間、排便習慣においてはその分布に小学生、中学生ともに性差がみられ、朝食の摂取状況は中学生のみに性差が認められた。好き嫌いの程度、テレビの視聴時間については性差はみられなかった。HPIの分布でみると最頻値は男女とも小学4年生で4点、小学5、6年生で3点、中学2年生男子（4点）を除いて中学生は3点であった。性別によるHPI分布には小学6年生及び中学2、3年生では有意差が認められた。これらの学年ではHPI高得点の女子が男子に比べて少ない傾向がみられた。HPIの平均値は小学4年生では性差はみられな

かったが、小学５、６年生及び中学生では男子の HPI の方が女子より高く、また、小学生では学年が上がるにつれて男女とも HPI 得点が下がる傾向がみられた。

PS スコアの平均を t 検定で比較したところ、どの学年でも性差は認められなかった。また、学年が上がるにつれて男女とも PS スコアの平均は高くなる傾向がみられた。PS スコアとライフスタイルについて、望ましいライフスタイルである方が望ましくないライフスタイルのグループに比べて PS スコアは低いという結果が５つ全てのライフスタイル項目について得られた。中でも睡眠時間と朝食の摂取状況については特に PS スコアとの関連が強くみられた。すなわち、睡眠時間では４年生男子を除く小学生全てにおいて PS スコアは t 検定で有意な差が認められ、中学生女子及び中学３年生男子でも有意差が認められた。また、全ての学年で男女ともに朝食の摂取状況によって PS スコアには有意な差が認められた。小学４年生女子と中学１年生男女、及び中学２年生男子においては好き嫌いの程度によっても PS スコアに有意な差が認められた。小学５、６年生ではテレビ視聴時間によって男女とも PS スコアに有意な差が認められたが、中学生においてはテレビの視聴時間と PS スコアとの関連はみられなかった。中学２年生を除く小中学生男子において PS スコアは排便習慣によって有意な差を認めたが、女子では小中学生のどの学年でも排便習慣と PS スコアとの関連はみられなかった。

HPI を３群に分けて一元配置分散分析にて解析したところ PS スコアには有意な差がみられ、どの学年でも男女とも“good”グループ(HPI＝4-5)の PS スコアが最も低く、次に“moderate”グループ(HPI＝2-3)、最も PS スコアが高いのは“poor”グループ(HPI＝0-1)であった。

〔総　　括〕

小中学生においてライフスタイルと精神身体症状の間には強い関連性が認められた。中でも精神身体症状との関連が強いのは睡眠習慣と食習慣であった。HPI を小児に適用するのは本論文が初めてであるが、成人同様に小中学生においてもライフスタイルを包括的に評価することが可能であることが示唆された。多くの小中学生が望ましくないライフスタイルを有していることが示され、深刻な身体的、精神的な健康障害を引き起こす恐れがあるといえる。

論文審査の結果の要旨

本研究は小中学生におけるライフスタイルと精神身体症状との関連を調べるために行った自記式アンケートによる調査研究である。

５つの健康習慣（睡眠時間、朝食の摂取状況、好き嫌いの程度、排便習慣、テレビの視聴時間）について望ましい習慣に１点を与えて合計したものを健康習慣指数：Health Practice Index（HPI）として HPI と不定愁訴スコア（Psychosomatic symptoms score）との関連を検討したところ、“poor (HPI＝0, 1)”, “moderate (HPI＝2, 3)”, “good (HPI＝4, 5)”の３群間に統計学的に有意な差がみられ、学年、性別に関わらず“good”グループの不定愁訴スコアが最も低い結果であった。また、ヒューマンサポートが高いほど不定愁訴スコアは低く抑えられることが分かり、小中学生の精神的身体的健康には健康習慣と同時にヒューマンサポートが重要な役割を果たすことが明らかとなった。

健康習慣指数（HPI）を小中学生に適用したのは本論文が初めてであり、今後の小中学生のライフスタイル研究に役立つものと考えられ、よって本論文は学位の授与に値すると考えられる。